

# 横光利一「碑文」論

——『聖書』を相対化する語り

英 荘 園

一、

「碑文」は、一九二三年（大正十二年）七月十日発行の『新思潮』（第六次の二）第一号に発表され、翌年五月、春陽堂刊行の横光利一の短編集『日輪』に収録された、横光利一の初期作品である。横光は、「大正十二年の自作を回顧して——最も感謝した批評」（『新潮』第四十巻第一号、一九二四年一月）で、次のように述べている。

自分では、「碑文」が一番気に入つてゐます。「蠅」は最初諷刺のつもりで書いたのですが、真夏の炎天の下で今までの人間の集合体の饒舌がびたりと急に沈黙し、それに變つて遂に一疋の蠅が生々と新鮮に活動し出す、と云ふ状態が諷刺を突破したある不可思議な感覚を放射し始め、その感覚をもし完全に表現することが出来たなら、ただ単にその一つの感覚の中からのみにも生活と運命とを象徴した哲学が湧き出て来るに相違ないと自惚れたのです。「日輪」については、生田長江氏の批評に最も感謝し氏の深い理解と洞察とに敬意を表しながらも、尚一言の教示をお願ひしたいと云ふことは、十九世紀以来人々の捨て去つて来た概念的的精神活動を、私は「日輪」に於ていま一度

拾ひ集め、いにしへの饗宴を再び二十世紀の断層の中に展開せんがため、これを作中に於ける形式的外形的動力の原動力たらしめたいと願つた私の企てに対する氏の評言であります。もしかかる企てをしたならば、他の多くの評論家諸氏の言葉の如く、そこには何らの精神的な作者の視野を表現することが出来ないことと明白なことに相違ありません。しかし、私は作者の精神価値は、歴史物にあつてはあながちその題材的価値及び概念否定に依つてのみ決定せられるものとは思へません。時には、その題材に埋没されたる概念的伏線の騫激する端的な熱情の方向に時にはその伏線の特質たるべき力線の音楽に、時にはそれらの産むべき莊重な童話的伝説的終結の一点に、さうしてそれら様々な概念的線条の隆起曲折する内面波動と外面リズムの誇張した調和の中に、作者の精神活動を洞察し得べき方法のあるのを発見したとき、私は喜んでこの愚な物語を音楽と名付けて書き続けたと云ふ傲慢さを申上げねばなりません。

横光は、一九二三年、「回顧」で言及した三作品「碑文」「蠅」「日輪」に加え、「マルクスの審判」と「落された恩人」の計五篇の作品を発表している〔1〕。周知のように、「蠅」および「日輪」は、横

光の出世作<sup>②</sup>であり、当時の文壇の注目を集め、今日でもこれら論じた研究は数多い。しかし、「蠅」と「日輪」ほどの注目作ではない三作品も含めた五作品のうち、横光が「碑文」について傍線部のように「一番気に入つてゐる」と述べていることに注意したい。これらの作品の中で、横光は、何故「碑文」を一番気に入つてゐるのか。この問題を説明することが、本稿の目的である。

## 二、

「碑文」についての研究は極めて少ないが、その多くが本作と『聖書』との関係について指摘してきた。まず、小田桐弘子は、「作品の中に「レバノンの成楼のごとく干されるであらう」という一節があり、これは旧約聖書の雅歌、第七章第四節の「レバノンの成楼のごとし」と対応され、この作品と聖書の関係も裏づけられる」<sup>③</sup>と述べ、『旧約聖書』雅歌の文言を典拠として指摘した。日置俊次は、「作品の舞台になっている、ヘルモン山にあるガルタンという都市は、よくわからない。しかし旧約聖書ヨシユア記にはヘルモン山が頻出する」と述べ、横光が「聖書のヘルモン山を意識しつつ描いたものが「碑文」であらう」<sup>④</sup>とした。また十重田裕一も、「碑文」が「旧約聖書を参照」<sup>⑤</sup>していることを指摘している。これらの指摘によって「碑文」が『聖書』を踏まえていることは明らかであるが、いずれの研究も、細かな分析がなされているとは言いがたい。ここで改めて『聖書』とのかかわりを確認しておこう。

「碑文」の冒頭部分で、小説の舞台は「ヘルモン山上のガルタン」と設定されている。小説の前半にも、「ガルタンの市民は、レバノ

ンの成楼のごとく干されるであらう」という一文が据えられる。レバノンに実在するヘルモン山は、先の日置が指摘するように、『聖書』に頻出することで知られている。「碑文」には、他にも、「レバノン」、「カイザリア」、「ソロモン」、「マハナイム」、「エルサレム」、「イスラエル」、「シオン」、「アマナ」のような「聖書」に頻出する固有名詞が見られる。

「碑文」において、これらの固有名詞が使われた場面を、具体的に抽出してみる。

①ガルタンの市民は、レバノンの成楼のごとく干されるであらう。

②嗚呼ガルタンの道念は、地に倒れたソロモンの旗の如く穢された。

③ガルタンの市民は、マハナイムの祭りに焼かれた犠牲のごとくヘルモンの上に載るであらう。

④嗚呼ガルタンよ。滅亡せよ。今や爾は吾のためにバタラビンの池のごとく亡びるときが来た。

⑤爾はアマナの山の牝鹿のごとく、八十人の男子に吾の眼を盗んで爾の胸の香物を嗅がしめた。

①は、小説の冒頭で、降り続く雨に対する不満や不安を酒で紛らわしているガルタンの市民の台詞である。②と③は、哲学者カンナが会堂の哲学者に語りかけた言葉である。④は階上の観台から市民の恐怖をひそかに楽しむ哲学者カンナの言葉である。⑤は、市民が自殺する前に、廻廊の壁に刻みつけられた悪業の一つである。

以上のように、「碑文」においては、「ガルタン」や「ガンタル」といった横光の造語と思われる固有名詞と「ヘルモン」を除き、『聖

書』の固有名詞は、すべて会話文のなかで用いられている。しかも、それらの固有名詞は、「レバノンの戊楼のごとく」、「ソロモンの旗の如く」、「マハナイムの祭りに焼かれた犠牲のごとく」、「バタラビンの池のごとく」、「アマナの山の牝鹿のごとく」のように、「〜のごとく」という助動詞とセットで用いられているのである。『聖書』の固有名詞が「〜のごとく」という共通の助動詞と共に使われていることは、「碑文」にとつてどのような意味を持つのだろうか。

前引の小田桐論が指摘しているように、「レバノンの戊楼のごとく」は旧約聖書の中でも『文語訳聖書』の一節であり、横光はそれをそのまま「碑文」に用いている。また、「バタラビンの池のごとく」については、「バテラビムの門のほりにある池のごとく」（『雅歌』七章五節）の中の「バテラビム」ではないかと推測する。「レバノンの〜のごとく」という表現は、『文語訳聖書』中に六箇所ある<sup>⑦</sup>。

「詩編」七十二章十六節

国のうち五穀ゆかたにしてその実はレバノンのごとく山の  
いただきにそよぎ邑の人々は地の草のごとく栄ゆべし

「詩編」九十二章十二節

義しきものは棕櫚の樹のごとく栄えレバノンの香柏のごと  
くそだつべし

「雅歌」四章十一節

新婦よなんちの唇は蜜を滴らすなんちの舌の底には蜜と乳  
とありなんちの衣裳の香氣はレバノンの香氣のごとし

「雅歌」七章四節

なんちの頸は象牙の戊楼の如く汝の目はヘシボンにてバテ

ラビムの門のほりにある池のごとくなんちの鼻はダマスコ  
に対へるレバノンの戊楼のごとし

「ホセア書」十四章六節

その枝は茂りひろがり其美麗は橄欖の樹のごとくその芬芳  
はレバノンのごとくならん

「ホセア書」十四章七節

その蔭に住む者かへり来らんかれらは穀物の如く活かへり  
葡萄樹のごとく花さきその馨香はレバノンの酒のごとくなる

べし

これらの引用から見れば、「レバノンの〜のごとく」という表現は、『文語訳聖書』特有の言い回しのものである。レバノン以外にも、「〜のごとく」は『文語訳聖書』には一般的に見られる、基本的な表現である。

海老澤有道<sup>⑧</sup>によれば、邦訳『聖書』の最初の組織的な翻訳は、一八八七年に完成した「明治元訳聖書」である。その後、『新約聖書』は一九一七年に一度改訳されたが、『旧約聖書』はそのままの形で流布した。新約も旧約も、口語訳が出されたのは戦後になってからである。よつて、「碑文」執筆当時の横光が参照したのは『文語訳聖書』ということになる。

『口語訳聖書』では、「〜のごとく」という言い回しがなくなり、「〜のように」に替えられている。逆に言えば、「碑文」の時点では、横光にとつて聖書の世界とは、こうした文語によって語られるものだった。そして、横光は、「碑文」の発話や碑文の文言に、『聖書』の文体を模倣しているのである。『聖書』文体の模倣は、「碑文」発表当時、『文語訳聖書』に親しんできた読者にとっては自然に分か

ることであつただろう。しかも、「碑文」において、これらの「ゞのごとく」は、先に見たように、すべて会話文中で用いられている。同じ比喩表現でも、地の文において、「鋼螺線のやうに」「暴徒のやうに」など、「ゞのやうに」という口語的表現が用いられていることは対照的である。

人称代名詞にも注目しておきたい。「碑文」引用④⑤には、二重傍線で示したように、対称の人称代名詞「爾は」という表現が見られる。「碑文」において、「爾は」という表現も会話文だけに見られ、全部で七箇所ある。前引『文語訳聖書』『雅歌』にも二重傍線で示したとおり、「なんぢ」という人称代名詞が使われている。「ゞのごとく」と合わせて考えると、「碑文」における「爾は」という表現も、『文語訳聖書』の文体の模倣と言えらるだろう。

横光は、「碑文」において、登場人物たちの発話や碑文の文言と地の文とで文体を使い分けている。こうした文体の使い分けは何を意味するのだろうか。そして、横光は『文語訳聖書』の文体を援用することによって、何を描き出そうとしたのか。この問題を解明するためには、「碑文」の内容を分析する必要がある。

### 三、

まずは、登場人物である市民が、どのように「碑文」の世界を認識しているのか、確認しておこう。「碑文」は、「雨は降り続いた」という一文に始まる。この雨が原因で、ガルタンには異変が次々に発生し、「ガルタンに危機が来た」と志士は群衆に叫ぶ。この「未曾有の大降雨」について、ガルタンの哲学者らは「市の会堂に聚め

られ」、雨の原因と、それに応ずる「救済方法」について論争させられた。雨の原因について、様々な仮説が提出されるが、「救済方法」は、誰にも決められない。このとき、「名高い醜男カンナ」が次のように発言する。

「ガルタンの哲学者らよ、卿等は賢明の武器を捨て、卿等の祖父と父と妻とを吾に告げよ。卿等の子と孫とをガルタンに捜せ。嗚呼ガルタンの道念は、地に倒れたソロモンの旗の如く汚された。ガルタンの哲学者らよ、卿等は碧玉を飾つた裸形的首と、杯盤の香りを忘れて空を見よ、大いなる神は怒つた。ガルタンの市民は、マハナイムの祭りに焼かれた犠牲のごとくヘルモンの山上に載るであらう。嗚呼ガルタンの哲学者らよ。卿等は額に服罪の水を受けてガルタンを神に返せ。今や吾がガルタンの上には、滅亡と共に神の浄き恵与物が自殺となつて下つてゐる。」

カンナは、この事態について、神による怒りのせいであると説明し、そして、「卿等は額に服罪の水を受けてガルタンを神に返せ」と主張した。つまり、ガルタンの市民が罪を犯したために、神は怒つて、この雨を降らせたというのである。カンナはまた「滅亡と共に神の浄き恵与物が自殺となつて下つてゐる」とも述べ、この雨の原因がガルタン市民の罪にあり、それに応ずる「救済方法」は人々の「自殺」だとしたのである。

この「会合の詳細な報告は直ちにガルタンの城市に拡」がり、「恐怖の波が人々の胸から胸を揺るいでいつた」のに続いて、カンナは自分が話した通り自殺した。市民は、カンナの死を知り、「ガルタンに下つた福音は自殺である」と考え、「自殺が流行し始め」る。

そして市民は、自殺する前に、「各々廻廊の壁に市民の罪業の数々を刻みつけ」という行為に出る。「彼らの懺悔の心は、彼らの過去の悪業を刻み、彼らの怨恨は、生き残る市民の秘めた悪徳を彼らに刻ませ」、そして「人々は壁から壁へ押し流れて、日々に現れる新しい壁の文字を読み渡」ることで、これらの「悪業」と「怨恨」は世の中に曝露される。

「あ、爾は吾に石を背負せた銀子をもつて、イスラエルの女の首に手を巻いた。」

「あ、爾は吾が妻の腹に爾の子を落して逃亡した。」

「爾はシユラミの婦女のために、吾の娘を葡萄のごとく押し潰した。」

「爾是一片の番紅花を得んとして、シオンの商人に身を投げた。」

「爾はアマナの山の牝鹿のごとく、八十人の男子に吾の眼を盗んで爾の胸の香物を嗅がしめた。」

「あ、婚姻の夜の爾の唇は、廻り遶つた杯盤のやうに穢れてゐた。」

これら自身に関わる「悪業」を知る市民の間では、その後「自殺の流行が衰へ」、それに代つて「遽に殺人が流行」する。これらの「悪業」に駆りたてられた「怨恨者の復讐の剣は赤錆のまま、破廉を秘めた市民の胸へ公然と突き刺され」、「ガルトンの賤民達は、一斉に欲楽の篡奪者として貴族や富豪を殺戮し」、「悲鳴と叫喚が幾日も続いている」ことになる。ここでは、誰もが「悪業」とそれに対する「怨恨」が理由で殺人を犯していることに疑問を抱いていないと言える。

最後に二人の市民が登場し、カンナの予言を思い出し、ガルトンが滅絶するのは「何に故か」と問い合う。二人が「洗神者!」、「姦淫者!」、「篡奪者!」、「欺瞞者!」と「大道を彷徨ひ歩いてまた往き合ふ人々を罵つ」ていることから、その答えはガルトン市民の「悪業」である。「ガルトンを滅亡せしめたのは爾である。ガルトンを吾に返せ。」と二人から罵られた人々は、酒甕で二人を打つたが、その後は「二人に感染した狂人のやうに怒り出すと、また相手かまはず往き合ふ人々を打ち叩いて」、また「ガルトンを滅亡せしめたのは爾である。ガルトンを吾に返せ」と罵り合う。そして、小説は最後に残された二人が廻廊の端で突きあたり、抱き合ったまま死ぬ姿を描いて終わる。

以上のように、市民の視点に沿って内容を確認してみると、市民の認識が明らかになる。ガルトンの市民は、「ガルトンを滅亡せしめた」のは互いの「悪業」であると信じて自殺し、殺し合う。しかし、滅亡の原因が「悪業」であるという考えは、カンナが示した滅亡に対する一つの解釈に過ぎない。しかも、この解釈を市民が信じたのは、カンナが自ら自殺したからである。では、カンナは何故このように解釈したのであろうか。語り手は、市民が知らぬカンナの内面を描くことで、市民とカンナの認識にずれが存在することを示していると考えられる。

哲学者たちの会合の後、「恐怖の波が人々の胸から胸を揺るいでいき」、「ガルトンの大路小路では、叩かれたやうに乱舞が止まつて祈りの声が空に上つた」一方で、カンナは「竊に階上観台からガルトンの城市を見下し」ている。

「ガルトンよ、爾は爾の醜き慣習のために滅落するであらう。」

嗚呼ガルタンよ。滅亡せよ。今や爾は吾のためにバタラビンの池のごとく亡びるときが来た。」

彼は醜い顔に市民に放つ復讐の微笑を浮べながら、酒を呷つて首筋の動脈を切断した。併し、彼はふと傍に立つてゐる飲み干した酒甕に気がつくとき、その日会堂を震はせた自分の堂々たる雄弁と、酒甕と、自分の死体とを思ひ比べて物語つてゐる市民の言葉が浮んで来た。

「賢者は死んだ。賢者は自殺を怖れて美酒を飲んだ。賢者の言葉はエルサレムの卜者のやうに嘘言である。」

カンナは、「ガルタンよ、爾は爾の醜き慣習のために滅落するであらう」と考えながら、「復讐の微笑を浮べ」ており、ガルタンの滅落を楽しんでいるようである。その理由は、カンナが「その昔美しい妻を奪はれた独身者」であつたからである。「醜男」であることが原因で妻を奪われたカンナは、世の不公平を感じ、これをガルタンの「醜き慣習」のせいだと考えた結果、妻を奪われた恨みがガルタン全体への恨みに発展したのである。それ故に、「彼は醜い顔に市民に放つ復讐の微笑を浮べ」た。この後、カンナの死の直前の様子が読者に明かされる。

彼は酒甕を抱いて立ち上つた。そして、蹠跟として圓柱を辿りながら部屋の中を廻り始めたが、四方の壁となつて積み上げられた哲学書の山々は、到る所でその偽善を湛へた酒甕の隠匿所になることを許さなかつた。が、最後に彼は庭園の池の底を胸に描いた。彼は衣の裾から滴る血の一線を床石の上に引きながら、長く緩慢に池の方へうねつてゐる石階を下つていつた。と、途中で彼の膝はがくりと前に折れた。彼は酒甕を抱いたま

ま、崩れた切石の隙から延び上つてゐる草の上へ転がつた。彼は起き上らうとして手に触れた立物に身を支へると、それは軟な一握の草だつた。彼は再び転がつた。が、彼の優れた智謀は咄嗟の間、彼の動脈の切断口を酒甕の口に着けしめた。間もなく、血は、ガルタンのために受けた不幸な彼の生涯を、その酒甕の中に盛り始めた。

「ガルタンよ、吾に倣へ。ガルタンよ、滅べ。」

血は刻々に酒甕の底から、彼の確信ある復讐の微笑をその表面に映しながら浮き上つた。それと同時に、恰もそれに伴奏するかのやうにガルタンの祈りの声は、断滅しながら黒まつて長く続いた葡萄園の上から流れて来た。

「ガルタンよ、吾に倣へ。ガルタンよ、滅べ。」カンナの頭は酒甕の口から切石の上へ亘つて落ちた。酒甕は顛覆した。血は彼の全身に降りかゝると、酒の香りを上げつ、段階を一つ一つと下つて池の方へ流れていつた。

「神の淨き恵与物」が「自殺」だとした自身の言葉の通り、カンナは「酒を呷つて首筋の動脈を切断した」が、ふと「飲み干した酒甕」の存在を意識する。そして、市民が自分の死体と酒甕と一緒に発見することを想像して、市民の「賢者は自殺を怖れて美酒を飲んだ。賢者の言葉はエルサレムの卜者のやうに嘘言である」という言葉を思い浮かべる。カンナは自分の自殺への恐怖心が市民に曝露されることによつて、市民に向けた自分の言葉が嘘だと気づかれることを怖れたのである。その後、カンナは酒甕の隠匿所を探すが、この一連の行動から「復讐」の計画が読み取れる。カンナが自分の自殺への恐怖心が市民に曝露されるのを怖れるのは、カンナが自殺こ

そ「救済方法」だと人々に予言していたからである。「神の淨き恵与物」であるのなら、死を怖れることはないはずである。しかし、カンナが自分の解釈を「エルサレムの卜者のやうに嘘言である」と思われることを想像しているという事実は、カンナはそれが嘘と自覚していることを示しているだろう。

「大いなる神は怒つた」という説明も、「救済方法」が自殺であるという主張も、全部カンナの「嘘言」であり、妻を奪われたことへの「復讐」である。彼は、「救済方法」は自殺であることを市民に信じさせるため、自ら範を示さなければならぬ。それ故に、カンナは市民の惨状を楽しみ、「復讐の微笑を浮べながら、酒を呷つて首筋の動脈を切断した」のである。しかし、酒甕の存在で、カンナは計画の欠陥を意識する。この欠陥を修正するために、カンナは酒甕の隠匿所を探したが、その途中、不意に転んで、そのまま「動脈の切断口を酒甕の口に着けしめ」る。この酒甕は、「飲み干した酒甕」であった。このままではカンナが死の前に酒を大量に飲んで恐怖を紛らしたことがいづれ市民にわかってしまう。そこで、カンナは、「彼の優れた智謀」によつて意図的に血を酒甕の中に注ぐということを演じた。「ガルトンよ、吾に倣へ。ガルトンよ、滅べ」と言いながら、「確信ある復讐の微笑を」浮べた時点で、カンナの復讐の計画は完成したのである。

市民は、「ガルトンを滅亡せしめた」のは「罪業」と考えるが、この認識は、カンナの「嘘言」に支えられている。一方のカンナは、「復讐」のために「ガルトンを滅亡せしめ」ようと考えた。これが登場人物の関係性という点から分析した小説の内容である。しかし、そのカンナの計画だけが小説世界を動かしているわけではな

い。次節では、地の文における語り手の視点から「碑文」を分析する。

#### 四、

「碑文」冒頭の一文は「雨が降り続いた」、最後の一文は「併し雨は依然としてヘルモンの山に降り続いた」である。ガルトンの滅亡の過程を描く小説は、「降り続」く雨という点で首尾照応する。首尾だけではなく、「雨が降り続いた」に類するフレーズは、地の文に五回出現する。

①雨は降り続いた。併し、ヘルモン山上のガルトンの市民は、誰もが何日太陽を眺め得るであらうかと云ふ予想は勿論、何日から此の雨が降り始めたか、それすら今は完全に思ひ出すことも出来なくなつた。人々の胃には水が溜つた。

②不眠に懊む者達は寝台の上から飛び降りた。さうして、彼らは何時の間にか、見ず知らずの者達と一つの集団を作りながら、歩道や廻廊の上を暴徒のやうに踊り廻つてゐる自分を知つた。が立ち停つて顔を見合せた瞬間、彼らは不可解な憎悪を感じて互に侮蔑の視線を投げ合ふと又踊つた。

併し、雨はヘルモンの山に降り続いた。

③彼らは直ぐさま酒甕へその唇をあてながら、酒舗や劇場へ雪崩れ込むと、魚のやうにべたべたと大理石や白檀の上へ酔ひ潰れて又叫んだ。

けれども、雨は降り続いた。日に日に市民の死者が急激に増加した。それら死者の顔は老若男女に拘らず、皆一様に老老の

相に変わつてゐて、齒は揺るぎ、雀んだ肉の影には岩のやうに疥癬の巢を張らせ、さうして、彼らの頭髮は引けば茹だつた芋毛のやうにほく／＼と撚れてきた。

④ 怨恨者の復讐の剣は赤錆のまま、破廉を秘めた市民の胸へ公然と突き刺された。それに和してガルタンの賤民達は、一斉に歓楽の篡奪者として貴族や富豪を殺戮した。悲鳴と叫喚が幾日も続いていつた。廃れた花園や路傍の丈伸びた草叢の中には、到る所男女の死体が、酒盃のやうな開いた傷口に雨に湛へて横たはつてゐた。併し、雨はます／＼降り続いた。ガルタンの殺戮は次第にその勢ひを弱めていつた。が、それにひきかへ、市民の肉体は日に日に激しい性の衝動を高め始めると、終にガルタンの城市はヘルモンの山上で、声を潜めた一大荒唐所と変わつて来た。

⑤ かくしてガルタンは永久に沈黙した。高い空宙からガルタンの城市を見下すと、人々の行跡を刻んだ壁の周囲に、点々としてゐる市民の死骸は丁度黴のやうに青白く見えてゐた。併し雨は依然としてヘルモンの山に降り続いた。

物語の語り手は、ガルタン市民の狂気を描きつつ、「雨は降り続いた」というフレーズを繰り返す。しかも、「降り続いた」の前後にはいずれも「併し」あるいは「けれども」という逆接の接続詞が見られる。逆接の接続詞のあとには、本来、先行の文章と対立する現象が書かれなければならない。しかし、①の場合、「併し」には逆接の意味は読み取り難く、むしろ順接の接続詞「だから」に置き換えたほうが、文脈としてはわかりやすい。②～⑤の逆接も、順接の接続詞「そして」の意味でとるか、あるいは逆接を無視したほう

が、登場人物のレベルに即した文脈としては意味が通じるかもしれない。

つまり、これらの「併し」は、「雨は降り続いた」という状況が、登場人物の認識や行動のレベルを越えたものであることを示しているのである。雨は、人々が互いに憎み合い②、酒におぼれ③、殺し合い④、ついにすべての人間が死滅しても⑤、変わらぬ「降り続」く。「併し」は、登場人物たちの認識とは無関係に作用するやうな、もう一段上のレベルを指し示している。そして、この「降り続いた」は、単に小説世界の背景に置かれているのではなく、小説世界を規定する枠組みのやうなものだと考えられる。言い換えれば、「併し、雨は降り続いた」というフレーズの反復によって、ガルタンの滅落があらかじめ決定された結末であることが読者に示されているのである。

以下、この雨が具体的にどのようにガルタンの滅落に影響しているのかを分析する。

雨によって最初に影響を受けたのは、市民の肉体である。最初は「胃には水が溜り、婦女たちの「乳房はだんだん青く脹らむ」といった程度の問題だったが、この肉体の異変によって、徐々に精神も影響されていく。「赤子や子供は水を飲まされた怒りのために母親の乳首を噛み、」通行人は腹立たしさに、「高窓から」「空を仰いでゐる」人を「嘲弄」する。「嘲弄」された方は怒り、「椅子や器物を歩道の上へ投げつけ」る。また歩道からは「礫が高窓を狙つて飛び込」む。それでも、この段階では「忽ちの間に鎮」つて、「後悔の標に」、「げら／＼と笑ひ合つて」済んでいる。

しかし、雨は止まない。次の段階に入ると、酔漢たちが夜間に騒



ぎ出し、「不眠に懊む者達」が「暴徒のやうに躍り廻」る。つまり、歩道の上下という狭い範囲ではなく、より集団的な精神の問題に発展していくのである。ガルタンの日常生活は完全に崩れてしまい、個人的な精神問題にとどまる段階では、まだ自分の行動を制御できていたが、この段階になると、「顔を見合せた瞬間、彼らは不可解な憎悪を感じて互いに侮蔑の視線を投げ合ふ」とあるように、互いの行動に憎悪を感じ、それを制御できずに感情をあらわにしてしまうのである。

その後、「けれども、雨は降り続いた」に続き、「日に日に市民の死者が急激に増加し」ていったことが語られる。「それら死者の顔は老若男女に拘らず、老耄の相に変わつてゐ」て、「歯は揺るぎ、窪んだ肉の影には岩のやうに疥癬の巣を張らせ」、「彼らの頭髮は引けば茹だつた芋毛のやうにぼく／＼と撚れて」くる。こうした記述から、「死者が急激に増加」したのは、肉体の異変が積み重なつた結果と考えられる。

ここでカンナの予言が示され、彼の嘘を信じた市民の間に「自殺が流行し始め」る。「初め彼らの多くは、穢れたガルタンの慣習に怨恨を持つ失恋者や疾病者や不具者であつた」のだが、その後「健全な市民の多くが自殺」するようになる。つまり、最初にカンナの嘘を信じたのは、カンナと同じように怨恨を抱いた人々であつたが、その後、健全な人にも自殺が広まってゆくのである。

この「自殺の流行」に耐えられた市民も、次第に理性を保つことができなくなる。「自殺の流行が衰へ始めると、それに代つて遽に殺人が流行した」が、「併し、雨はますます降り続」き、「殺戮は次第にその勢いを弱めてい」く。その一方で「肉体は日に日に激しい

性の衝動を高め始め」、ガルタンは「一大売淫所と変わつて」いき、最後に「ガルタンの市民は、過去の一切の記憶を忘却し、眠りに落ちる青白い獣であるかのやうに、たゞ呆然と生きてゐるにすぎなく」なる。

語り手の視点でガルタンの滅落を確認すると、ガルタンの異変は漸進的であると言える。精神の異変も肉体の異変も、地の文の記述からすれば定量的であり、定性的ではない。つまり、雨の及ぼす影響が少しずつ積み重なつた結果であると言える。個人的な精神の問題は、やがて集団的な精神の問題に発展する。さらに進むと、市民は自殺し、殺人を犯し、さらに性衝動も抑えられなくなる。人間は理性を少しずつ失ひ、「過去の一切の記憶を忘却し、眠りに落ちる青白い獣」になる。最終的に、二人の市民がカンナの予言を思い出し、人々も「一斉に忘却してゐたガルタンの記憶を投げつけられ」、また「狂人のやうに怒り出し、殴り合い、「ガルタンは永久に沈黙」するのである。

ガルタンの市民は、「ガルタンを滅亡せしめた」のは「悪業」と思いこみ、この「罪業」から救われるために自殺する。また怨恨を抱いた人々については、「怨恨者の復讐の剣は赤錆のまま、破廉を秘めた市民の胸へ公然と突き刺され」、階級問題のため、「賤民達は、一斉に歓楽の篡奪者として貴族や富豪を殺戮」するに至る。しかし、この「悪業」についての認識は、カンナに騙された結果である。そして、カンナは、「ガルタンを滅亡せしめた」のは自分の「復讐」と思いながら、自殺したのである。

このように見ていくと、「碑文」の中で、自分の行動が少しずつこの「降り続いた」雨に影響されていたことを誰も意識していない

ことがわかる。登場人物たちは自分の意識に基づいて行動していると思っ  
ているが、すべての行動は時間と空間の中でこの「降り続いた」雨に支配  
されている。自殺も、殺し合いも、この雨に影響された結果であるが、こ  
れを意識していない市民は、カンナの解釈を信じ、「悪業」が原因だと思  
い込む。その時、繰り返される「雨は降り続いた」というフレーズは、登  
場人物たちの意識がきわめて限定であることを伝えるものに他ならな  
いだろう。

「碑文」では、物理的な空間も厳密に作られている。哲学者たちの集  
会において、「或る哲学者はガルタンがヘルモン山上に位置するを以つて  
と云ひ、或る者は新生の惑星が城市の上空を飛遊しつつあるが故と論じ」  
た。その後、一人は「ヘルモンの山を下りよ。ガルタンの市民はカイザ  
リアへ逃げよ」と言い、別の誰かが「空は続いてある」と答え、また別  
の人物が「ガルタンを捨てて、ボルペレオンへ行け。」と言ひ、「ヘル  
モンを下る大道は瀑布である。」と答える。そして、カンナが自殺によ  
つて救われると説明した後、「会合の詳細な報告は直ちにガルタンの城市  
に抜つた」という過程を経過し、「恐怖の波が人々の胸から胸を揺るいで  
いつた」。市民は自殺するときも、「廻廊の壁に」「罪業の数々を刻みつけ  
」、「人々は壁から壁へ押し流れて、日々に現れる新しい壁の文字を  
読み渡つた」という空間的な移動を経過する。こうして市民は具体的  
な「罪業」を知り、「遽に殺人が流行」することになる。

「ヘルモン山上」、「城市の上空」、「ヘルモンを下る大道」、「公堂」  
から「城市」への距離、「廻廊」の中の移動、横光はこれらの場所を設定  
するだけでなく、これらの空間での移動の過程まで意識しながら、「碑文」  
を書いた。この横光が作った空間内で、すべて

の存在は、移動を制限され、過程に支配される。この時空間で「降り  
続いた」雨は一貫して登場人物を支配している。市民は自分の意識で  
行動していると思っ  
ているが、その一つ一つの行動は全てこの時空間の関係によつて決定  
されているのである。

## 五、

以上、見てきたように、「碑文」を語りの視点で読めば、「ガルタンを滅  
亡せしめた」のは「罪業」でも「復讐」でもなく、「降り続いた」雨に  
他ならない。小説世界の中で、人間は自分の意識によつて行動して  
いると思っ  
ているが、その行動は環境に決められたものである。

『文語訳聖書』の「創世記」の中でも、世を滅ぼす雨が描かれて  
いた。『聖書』の中で、「エホバ」は人の悪を見て、「地の上に人を造  
りしこと」を後悔した。そして、「洪水を地に起して凡て生命の氣息  
ある肉なる者を天下より剪滅」することを決めた。「エホバ」は  
「大淵の源皆潰れ天の戸開けて」、「四十日四十夜地に雨ふらし  
た。「水甚大に地に瀾漫りければ天下の高山皆おほはれた」結果、  
「凡そ地に動く肉なる者家畜獣地に匍ふ諸の昆虫および人皆死」ぬ。  
しかし、「エホバの目のまへに恩を得」たノアは、「義人にして其世  
の完全き者」として、「松木をもて」「方舟を造り」、「洪水を避  
て方舟にい」ることで「剪滅」から許された。これが有名な「ノア  
の方舟」の話である。

「碑文」と「創世記」の相違点について、小田桐弘子は、「この短  
篇「碑文」は、旧約聖書の創世記にしろされているノアの洪水の物

語のように大雨によって、都市ガルトンが滅亡する話である。しかしノアの洪水と違って、最後の一人に到るまで救われず、洪水によってガルトンの市民全部が死んでしまう。もちろん、ガルトン市はまったく滅亡するという話である」と述べている。確かに、「聖書」においてノアは救われたが、「碑文」においては、誰も救われず、「ガルトンは永久に沈黙」するしかない。「聖書」においては、「人の悪」こそ「エホバ」が人を「剪滅」する原因であった。「エホバ」は「四十日四十夜地に雨ふら」すという方法を通じて、「水甚大に地に瀾漫りければ天下の高山皆おほはれ」たりという状況に至らせ、人を「剪滅」する。つまり、「エホバ」は世界を沈ませることで直接に人を「剪滅」する。そしてノアは「義人」であるが故に、「エホバ」に救済方法を教えられ、方舟で生き残った。「聖書」の世界では、悪業をなす者は殲滅され、善行をなす者は神から救われる。人間の意識がその運命を決めるのである。

一方、「碑文」において、市民の精神と肉体は、この「降り続いた」雨の影響で壊れていく。自殺も、殺し合いも、すべての行動がこの雨に影響された結果である。自分の行動が雨に影響されていることを意識できない市民は、カンナの「嘘言」を信じ、行動の理由を「悪業」と解釈した。そしてカンナもまた、自らの「復讐」の計画が実現されたと信じている。しかし、横光が作ったこの厳密な時間と空間を持つ世界の中で、ガルトンの滅亡は、あくまで雨の影響で漸進的に発展したものである。すべての存在は、過程のなかに入り、その行動は、時空間の内部の関係、つまり、環境によって決められている。そこには「エホバ」のような存在はなく、誰もこの関係から逸脱できないのである。

第二節で指摘した、「碑文」の登場人物たちの会話が『文語訳聖書』の文体を模倣していることに戻る。この文体の模倣は、「碑文」の登場人物たちが、『文語訳聖書』の世界と繋がっている存在であり、『聖書』の世界観で諸現象を認識することを示している。いっぽう、「碑文」の語り手は、『文語訳聖書』の世界を相対化する存在である。「碑文」において、横光は、登場人物たちの語り手に『文語訳聖書』の文体を用い、語り手の語りと明確に区別した。このことによって、彼は登場人物たちの認識レベルと、それを相対化する語り手のレベルを区分し、環境に支配されていることに気づくことさえできない神の民の愚かさをアイロニカルに描き出しているのである。

横光は『文語訳聖書』の文体まで模倣して、神の存在を前提とした因果応報の論理を意識させつつ、その論理を相対化して、誰でも環境に決められた運命から逃げられないという思想を読者に伝えようとした。そして、この思想はその後横光の小説を構成する重要な要素となっていくと考えられる。その点については稿を改めたいが、これが、横光が「自分では、『碑文』が一番気に入ります」と述べた理由であると考ええる。

#### 注

(1) 横光は晩年の「解説に代へて(一)」「三代名作全集——横光利一集」、改造社、一九四一)の中で次のように述べている。「初期の作品の中で一番初めに書いたものは「蠅」である。次に「笑はれた子」「御身」「赤い色」「落された恩人」「碑文」「芋と指輪」といふ順番であるが、これらは皆、私の

二十歳から二十五歳までの作で、表現とはいかなるものかを厳密にまだ知らず、筆を持つ態度にのみ極度に厳格になつてゐた一時期の作である。この時期には、私は何より藝術の象徴性を重んじ、写真よりもむしろはるかに構図の象徴性に美があると信じてゐた。いはば文学を彫刻と等しい芸術と空想したロマンチズムの開花期であつたが、この時期の最後の作が「日輪」であり、これが文壇といふ市場の雑誌に掲載された處女作となつたことは、我ながら不思議なことだと思つてゐる。この記述によれば、これらの作品は同じ時期に発表されただけでなく、同時期に書かれたことも確認できる。

(2) 川端康成は、『横光利一作品集1』（創元社、一九五二・三）の「解説」で、「日輪」、「蠅」、「碑文」、「上海」について言ふ頁はなくなつた。しかし、この第一巻の解説では、「日輪」、「蠅」などの横光の出世作、当時の問題作よりも、それ以前の「火」、「御身」などの田園的な、あるひは自伝的な作品に、横光の読者の注意を促せば、それで私は満足する」と述べた。その七ヶ月後、岩波文庫「機械 他九篇」（岩波書店、一九五二・十）の「解説」で、川端は、「横光はその年の五月、『文藝春秋』に「蠅」を、『新小説』に「日輪」を發表して、たちまち特色の顕著な新作家として注目された。翌十三年に当時の新進作家二十名近くが同人となつて『文芸時代』を創刊して、新感覚派の文学運動が、この時に興つた。横光はその先頭であり、代表であつた」と述べた。「日輪」、「蠅」は、横光の「出世作」であると言へる。

(3) 小田桐弘子「『碑文』論」（『横光利一』、南窓社、一九八〇・五）は、「碑文」に、ポーの「赤き死病の仮面」の影響があつたことも指摘する。

(4) 日置俊次「横光利一論——初期作品から『夜の靴』へ」（『青山学院大学文学部紀要』五十一巻、二〇一〇・二）

(5) 十重田裕一「典拠の志向性——一九三三年、横光利一の文壇登場期を中心に」（『国語と国文学』八十七巻五号、二〇一〇・五）

(6) 海老沢有道「日本の聖書——聖書和訳の歴史」（『講談社学術文庫』一九八九）

(7) 本稿で引用する『文語訳聖書』は、サキ出版が二〇一三年十月に発行したものである。その底本は日本聖書協会が一九五三年に発行したものであり、初版は一八八七年に発行された、いわゆる「明治元訳聖書」である。

#### 付記

本稿中に引用した横光の文章は、すべて河出書房新社版『定本横光利一全集』に拠つた。ただし、仮名遣いは原文のままとし、旧漢字は新体字に改めている。

(えい・そうえん)